
ケンブリッジ・サマーセミナーに参加して

水野 晴光

第23回大学英語教育学会（J A C E T）サマーセミナーが、イギリスのケンブリッジ大学チャール・カレッジで7月29日から8月5日まで約一週間開催された。J A C E Tからの最終的な参加者は63名で、本学からは、松山、古岩井両先生と筆者が参加した。

講演は、英国アカデミー会長のR・クワーク博士による“International English and National Identity”、ノース・ウェールズ大学の言語学者のD・クリスタル博士による“English as an International Language”、ランカスター大学の文法学者であるG・リーチ博士による“Communicative Grammar and Language Teaching”、カウンスル・オブ・ヨーロッパで著名なJ・トゥリム氏による“Syllabus Design and Definition”、さらにレディング大学の応用言語学者D・ポーター教授による“The Evaluation and Assessment of Language Proficiency”などいずれも筆者の興味ある話題で、

時の経つのも忘れる程の充実感を味わった。とりわけ、西欧における現在の言語教育の流れはFunctional/Notional Approachによるコミュニケーション・ムーブメントにあり、学習人口も若年層の他に老人、退職者などが増加しており、教室にコンピュータを導入して、C A Iやビデオによる授業が活発に行なわれているという。英語のクラスでは、学習者の目標に合わせた授業やドラマ・テクニクを用いた授業が極めて効果的であるという見解を打ち出している点に感銘した。とくに、最後のテクニクは、実際の作品を用いて、その空間構造、論理構造、情緒構造などを分析しつつ意味を掘り起こし、登場人物の気持ちを内部に喚起させ、しかるべき相手を想定して、その人物に語りかけるように朗読していく過程でスピーチ矯正を行なうものである。この手法は、日本の語学教育に多くの示唆を与えるものと信ずる。